

大学史編纂課だより

第2号

2011年9月30日 発行

目次

特集

◇日大スポーツ史 I 2

調査収集

◇予科文科櫻井誠一関係資料／大井照氏所蔵写真アルバム… 5

連載

◇日大・オリンピック①..... 3

◇太平洋戦争と学徒①..... 4



専門部歯科校舎・病院新築落成記念祝賀会 (大正14年)

大学史編纂課では、昨年度、大正14年当時の歯科関係写真7点を入手しました。関東大震災で壊滅的な打撃を受けた本学でしたが、2年後の大正14年には、新築校舎・病院が落成し、11月21日から3日間にわたり、専門部歯科の新築落成記念祝賀会が開催されました。掲載した写真は、口腔衛生資料展示会の様子と、新築校舎屋上で開かれた出店の写真です。



特集 日大スポーツ史 I

近代スポーツの黎明

わが国では、明治時代に入って来日した外国人（教師）がさまざまな競技を紹介し指導したことで、陸上競技・ボートレース・野球・水泳・テニスなどの近代スポーツが各学校で盛んに行われるようになっていきました。

明治42年（1909）春、東京高等師範学校校長嘉納治五郎のもとに、国際オリンピック委員会（IOC）会長ピエール・ド・クーベルタン男爵から、オリンピックに東洋からの参加がないので、日本がIOCに委員を出しオリンピックに参加してほしいという要望が届きました。青年体育を奨励していた嘉納は躊躇なくこの申し出を受け入れ、東洋最初のIOC委員になります。そして、明治45年（1912）第5回オリンピックストックホルム（スウェーデン）大会に初めて日本が参加することになったのです。そのため、国内スポーツの統括的団体として大日本体育協会（現日本体育協会）が設立されました。

その後、大正6年（1917）、フィリピン・中国・日本を主な参加国として戦前まで開催されていた（最終の第10回は昭和9年マニラ大会）極東選手権競技大会（第1回は東洋オリンピックという名称でした）の第3回大会が東京芝浦で開催されました。日本最初の国際的スポーツ競技大会として注目されたのですが、第1回から参加に消極的だった日本は、初参加となったサッカー・バスケットボール・バレーボールで惨敗し

ます。

オリンピック大会は4年に1度、極東選手権競技大会は2年に1度の開催で、両者は同一年に重なることはなく、国内では、この両国際競技大会へ派遣する選手を選ぶために予選会を行うことになっていきます。予選会は、競技団体の全国組織がない当初は大日本体育協会が主催し、各競技の全日本選手権大会開催時に兼ねて行われました。ほぼ毎年のように国内で大きな協議会が開催され、大学・専門学校・中学校等の学生生徒たちが代表を目指して奮闘し、わが国スポーツの振興に大きくかかわっていったのです。

日大スポーツのはじまり

本学は、身体鍛錬と精神修養を目的として明治38年（1905）に「日本大学運動会規則」を制定し、運動会の傘下に各運動部が設置されました。そして、この年には早くも端艇部（現ボート部）が創設され、翌年には「日本大学第一回水上運動会」を隅田川で開催し、2,000人もの観客が集まったといえます。また、同じ年、帝国大学秋季陸上運動競技大会の私立専門学校選手600ヤード競走に、大学部の岡村甫選手が出場して3等に入賞しましたが、これが本学選手の対外試合での最初の入賞記録とされています。

しかし、その後は、大正9年（1920）の大学令によって大学に昇格した頃においても、柔道部・陸上競技部・剣道部・相撲部がある程度で、他大学に比べて盛んではありませんでした。もっとも、昼は働き、夜は

戦前に創部された本学の主な競技部

明治38年(1905)	ボート部(端艇部)
大正5年(1916)	柔道部
大正10年(1921)	陸上競技部・剣道部・相撲部
大正13年(1924)	馬術部
大正14年(1925)	野球部
大正15年(1926)	卓球部
昭和2年(1927)	水泳部
昭和3年(1928)	ラグビー部・ボクシング部
昭和4年(1929)	サッカー部
昭和5年(1930)	弓道部・スキー部
昭和6年(1931)	バレーボール部
昭和10年(1935)	空手部
昭和12年(1937)	ヨット部
昭和14年(1939)	スケート部
昭和15年(1940)	レスリング部・アメリカンフットボール部



大正12年 本学初の大運動会（府中町運動場）



川口義久

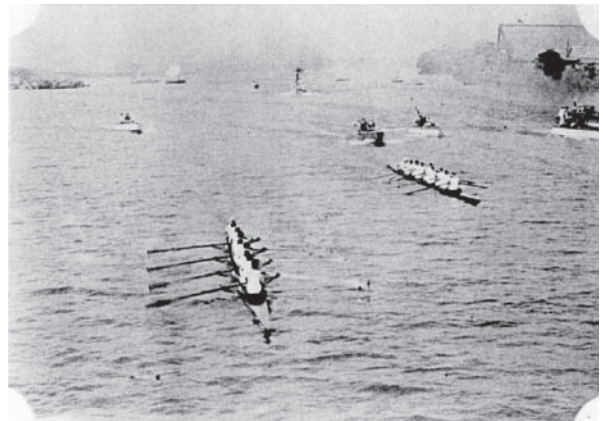
勉強という本学の夜間部制度中心では無理もないことだったのでしょう。

大正10年(1921)9月に行われた秋季学生大会の席上、川口義久学監は次のように演説したのです。

ところで諸君にお尋ねしたいのは、今、諸君は何か不足なものがあり

りはしないか(運動と呼ぶ者あり)、他の大学に較べて或は他の専門学校に較べて足りないものが一つありはしないか、何であるか、運動競技である(拍手喝采)。学問学術のうえにおいて、はたまた雄弁においては天下に覇を称へている我が日本大学が、ひとり運動競技においては貧弱と言うより、むしろ無いのである、まことに残念である、……早稲田・慶応のベースボール、テニスで商大を蹴飛ばし、ボートレースにおいては帝大を一蹴するだけの運動競技は必要である(拍手)

こうして、本学は翌年に都下府中町に運動場を取得、12年5月には、運動場開場式とともに、大運動会を催したのです。これに触発された運動部は、次第に実績をつみ、端艇部は、大正13年の明治神宮奉獻競漕で2位。昭和4年の第16回日本陸上競技選手権大会で森本一徳(専門部歯科)が10,000mで優勝、翌年第17回の走り高跳びで富谷利一(専門部)が優勝しています。また、水泳部は、昭和3年の12校連合水上競技大会で圧勝するなど、日大スポーツの歴史の扉を開いていきます。(田淵)



大正14年9月 十大校レガッタ(隅田川)

日大・オリンピック①

昭和7年(1932)7月～8月に開催された第10回ロサンゼルス大会で、日本は陸上競技・水泳・馬術・ホッケー・漕艇・レスリング・ボクシング・体操・スポーツ芸術の9競技に190名の選手・役員を送りました。初参加の第5回ストックホルム大会(明治45年1912)ではわずか4名(選手2名)1競技の派遣でしたから、わが国スポーツが飛躍的に成長していることがわかります。

ロサンゼルス大会では、なんとと言っても、男子競泳6種目のうち400m自由形を除く5種目で金メダルを獲得したことでしょう。そして、競泳男子800mリレー(4×200m)に、本学の遊佐正憲(法文学部法律学科)・豊田久吉(法文学部法律学科)がいました。遊佐・豊田と宮崎康二(浜松一中)・横山隆志(早稲田大)のメンバーが出した優勝タイムは8分58秒4。

従来の米国記録9分36秒2を約38秒上回る世界最高記録・オリンピック新記録を打ち立てたのでした。この他、本学から杉本盛が400m自由形で5位に入賞、ボクシングには亀岡勝雄(専門部法律科)がフェザー級に出場しました。(田淵)



荒川区立荒川ふるさと文化館所蔵皆川号外コレクション

① 太平洋戦争と学徒①

今年の12月8日で、昭和16(1941)年の太平洋戦争開戦から70年を迎えます。すでに体験者の数は減り、その記憶は日本人の中で風化しつつあります。そこで、今号から数回にわたって、学徒(学生と生徒)たちを中心に当時の様子を描き、薄れた記憶を呼び戻していきたいと思います。

初回は開戦以前の話です。大日本帝国憲法下、17~40歳の男子には兵役の義務があり、20歳になると徴兵検査を受けました。ただし合格者すべてが徴集されるのではなく、軍備の定員に応じて抽選で入営する者選ばれました。

また、中・高等教育機関の在學生は一定年齢(大学学部なら27歳)まで徴集が延期され、平時には卒業後も徴集される確立は高くありませんでした。むしろ陸軍では彼らに対して幹部候補生の受験資格を与え、戦時増員に際して必要となる予備役士官の補充源にと考えていました。

昭和12年に日中戦争が勃発して以降、しだいに戦時下の様相は深まり、14年からは徴集延期の年齢が引き下げられます。徴集率は、明治33(1900)年には検査対象者の1割程度でしたが、軍備の拡大にともなって増加し、40年後の昭和15年には7割以上となり、合格者のほとんどが徴集されました。

一方、経理や理工系分野では、軍は高等教育機関出身者にとって卒業後の進路の一つでした。採用は官立出身者が多数を占めていましたが、経理官は技術官に比べれば私立出身者の比率も高めでした。昭和15年には、本学法文学部からも陸軍経理部見習士官に副島俊彦、海軍短期現役主計科士官に中村幸男と、陸海軍の現役士官に1名ずつ採用されています。

太平洋戦争開戦後は、採用数の増加や徴集免除の停止もあって、さらに多くの学徒が初級士官として陸海軍に進むこととなります。(高橋)



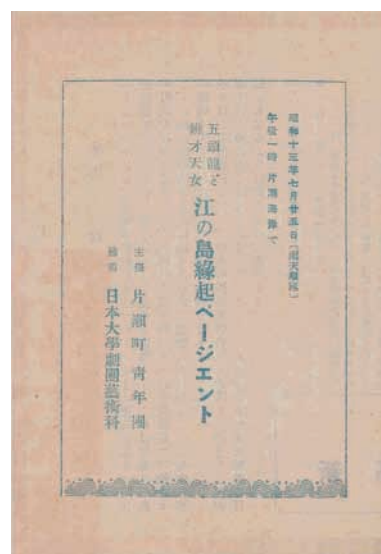
中村幸男が初任教育を受けた
海軍経理学校跡(中央区築地)

② 五頭龍と弁才天女「江の島縁起ページェント」パンフレット

片瀬町(現 藤沢市片瀬)青年団主催の江の島縁起ページェントは、江の島の起源とされる天女(弁才天)伝説を再現した野外演劇です。昭和12(1937)年から15年にかけて毎年開催され、演者を含め、日本大学芸術科が協力しました。この資料は、昭和13年7月25日に開催された際のパンフレットです。



野外ページェントでの木暮実千代、後列左から2人目
(『日本大学創立五十年記念帖』より)



当初弁才天は芸術科の学生だった木暮実千代が演じました。それが松竹の重役の目に留まったと言われ、昭和13年、木暮は在学のまま松竹に入社しています。(高橋)

日本大学予科学友会雑誌

校友の寺島正芳氏（文理学部史学科卒業）から、予科学友会が発行した『学友会雑誌』第1号と『学苑』第2号の寄贈を受けました。『学友会雑誌』は昭和14年の発行で、創刊の経緯などは述べられていませんが、この年4月に予科に理科が新設されて理科学友会を組織し、文科学友会と一体となった事業として本書の刊行が企画されたものでしょうか。

『学苑』は、予科学友会が昭和16年3月に発行したもので、誌名が異なっていますが、『学友会雑誌』第2号ということでしょう。『学苑』は、当時の円谷弘予科長が命名したとあり、「学友会の雑誌」としてふさわしい名称を第2号で付けたとも考えられますね。『学苑』の表紙の最下段に「紀元二千六百一年」と印刷されていることから察せられるように、第2号は、昭和15年（1940）の紀元2600年記念号として企画されましたが、応募論文の審査や編集の遅れで、刊行が持ち越されてしまったのです。

昭和13年の国家総動員法公布、続く近衛首相の東重新秩序建設の声明、日中戦争の長期化による国民生活の疲弊感を払拭するための紀元2600年の大々的な行事と、学校教育も次第に戦時体制下に組み込まれていきます。

そういう時期に本誌は創刊されています。かといって、本誌の内容が「国防・国家」を論じているわけではなく、第2号では「テレビジョンの発達及び近況に就て」・「孔雀船愚考」・「英語論」・「宮本武蔵の剣禅一如」等々と学術論文が充実しています。

太平洋戦争に突入り、学生たちが「最後の戦力」として軍事動員体制に組み込まれるまでには、まだ少し時間があり、学生たちは充実した学園生活をおくっていたのです。（田淵）



調査収集 予科文科櫻井誠一関係資料



名古屋市熱田区に在住の櫻井宏氏から、予科文科に在籍した櫻井誠一の「日本大学予科修了証書」（昭和4年）、「日本大学予科文科第十回卒業記念写真帳」（昭和4年）、「日本大学商学部経済学科卒業証書」（昭和7年）、「日本大学商学部経済学科卒業記念写真帳」（昭和7年）の寄贈を受けました。

卒業アルバムなど写真帳には、学生生活・スポーツ・校舎・風景など、その当時を映し出した写真が挿入されている場合も多く、大学史にとって貴重な資料です。（松原）

大井照氏（医学部卒業）所蔵写真アルバム

大学史編纂課では、第3代総長山岡萬之助の実弟で、本学の専門部歯科・医学科設置に協力した小坂早五郎関係の資料調査を実施しました。写真アルバムの所蔵者は小坂の令孫にあたる大井照氏（前東京都千代田区保健所所長）です。

小坂は、長野県諏訪平野村で開業し、平野衛生病院長も務め、昭和10年には本学の外科講師も務めています。その子息3人は本学専門部医学科を卒業し、長男知親氏（大井氏の実父）は、本学医学部教授に就任しています。

小坂家一族の多くは日本大学に関係しており、本学にとって貴重な資料といえます。（小松）



日本大学予科教授 桜田常久展（町田市民文学館）

平成23年1月22日から3月27日まで、日本大学予科教授を務めた桜田常久の「没後30年芥川賞作家桜田常久展—町田の戦中・戦後を生きて—」が、町田市民文学館で開催されました。

桜田は、大正8年（1919）に東京帝国大学独逸文学科に入学し、在学中に同人雑誌を創刊し、戯曲や小説を発表しています。12年3月に卒業し、日本大学予科教授に就任しました。予科文科でドイツ語を教えるかたわら、ドイツ戯曲を翻訳したり、予科山岳部の面倒も見ています。

昭和6年（1931）に南多摩郡町田町に転居し、教師を務めながら半農生活を営み始めました。昭和13年（1938）に日本大学を辞職した後、明治大学予科教授に就任しましたが、昭和18年の学徒出陣を機に辞職し、農耕と執筆の生活に専念するようになりました。この間、昭和16年に小説『平賀源内』により第12回芥川賞を受賞しました。

戦後は農民運動を行い、また『安藤昌益』・『画狂人北斎』・『山上億良』など、時代の転換期に生きた人物の伝記小説を発表しました。



「スポーツと靖国神社」展の日大選手（靖国神社）

平成23年3月18日から10月23日（予定）まで、靖国神社遊就館の特別展「スポーツと靖国神社—スポーツと共に生きた英霊たち—」が開催されています。

この特別展では、スポーツ選手として活躍し、太平洋戦争で戦死した学徒の写真や遺愛品などを中心に展示されています。本学出身では、越戸優一（水泳部）、石丸進一（プロ野球名古屋軍：現中日ドラゴンズ）、大澤龍雄（陸上競技部）、加田耕士（拳闘部）が取り上げられています。

越戸は、昭和15年開催予定の東京オリンピックの1500m自由形の候補選手でしたが、日中戦争によりオリンピックは幻に終わり、昭和20年5月にフィリピンで戦死しました。石丸は名古屋軍のエースとして活躍し、戦前最後のノーヒット・ノーランを達成しています。昭和20年5月に特攻隊第5筑波隊で出撃し、南西諸島で戦死しました。大澤は箱根駅伝連覇に貢献し、昭和15年には3,000m障害で日本記録を樹立しています。彼も東京オリンピック候補選手でしたが、昭和19年12月にパラオ諸島にて戦死しました。加田は、戦時下の拳闘部で中心選手として活躍しています。昭和20年5月に中国で戦病死しました。

戦後、このような前途有望な選手を失ったことを惜しんで、越戸の出身地である岩手県では「越戸賞」（高校水泳新人大会）が設けられ、大澤の出身地である栃木県では「大澤駅伝」が毎年開催されています。

「日大・学祖・日藝」展

5月21日（土）、芸術学部新入生歓迎行事で大学史資料展示を行いました。当日は、新入生をはじめ在学生や一般の方々約190名の来場がありました。



全国大学史資料協議会東日本部会2011年度総会開催

6月3日（金）、東日本部会の総会が、女子美術大学相模原キャンパスを会場に開催されました。総会終了後、女子美術大学歴史資料室のスタッフの案内で、創立100周年を記念して相模原キャンパスに設立された美術館「女子美アートミュージアム」（通称JAM）と収蔵庫および図書館を見学しました。



JAM収蔵庫

—— 刊行物案内 ——



広報部大学史編集課編

日本大学のあゆみ（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）

- 目次 Ⅰ…日本法律学校の誕生／明治期の学園風景／大学令と日本大学
Ⅱ…戦時体制下の学徒／戦後の教育改革と日本大学／高度経済成長と大学の大衆化／大学紛争と変化する学生たち
Ⅲ…国際化・情報化時代の日本大学／校外生から生涯教育へ／日本大学とスポーツ文化活動／活躍する日大人



大学史論輯

叢誌 第6号

- 目次：平沼騏一郎の教育思想（浅沼薫奈）／日大の男・古田略伝（岩田武史）／軍医補充と高等教育機関（高橋秀典）／山田顕義の書簡 三島通庸宛（田淵正和）／戊辰戦争期の山田顕義関係資料について（松原太郎）／戦時下の箱根駅伝と学徒出陣1（小松修）ほか



佐藤三武朗（国際関係学部長）著

日本巨人伝 山田顕義 四六判 256頁 定価1429円（税別）講談社 2011年1月刊

日本には法が必要だ、頼む山田一法を創り、日本を創った。日本大学の学祖にして、知られざる最後の志士、激動の生涯！（帯文より）

〈目次〉序章／第1章：望郷／第2章：誕生／第3章：軍人山田顕義／第4章：米欧使節団／第5章：法律制定への道／第6章：日本法律学校の設立／第7章：誕生と終焉の地／あとがき

＝ 母校に関する資料が皆さんのそばに眠っていませんか

資料・情報提供のお願い

大学史編纂課では、「日本大学史」に関する資料を広く収集しています。本学の歴史・学生生活・校友の足跡等のようなことでも結構ですので、お気軽に編纂課（TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592）までご連絡ください。

活動報告

平成23年1月～9月

○調査研究

- 3月28日 町田市民文学館「桜田常久展」（芥川賞作家、本学予科教員）調査
- 3月30日 松戸歯学部史資料室調査
- 4月7日 靖国神社「スポーツと靖国神社」展調査
- 4月21日 山田顕義事績調査（葛飾区浄光寺）
- 4月23日 金子堅太郎研究会（お茶の水キャンパス）
- 5月13日～14日 宮崎道三郎関係資料調査（大阪府）・山田顕義事績調査（京都府）
- 6月3日 全国大学史資料協議会東日本部会2011年度総会（女子美術大学）
- 7月8日 東京国際ブックフェア資料保存関係調査（東京ビッグサイト）
- 7月13日 武蔵野美術大学図書館「清水多嘉示資料展 第Ⅰ期」調査
- 7月25日～27日 山田顕義事績調査（島根県津和野町、山口県山口市・萩市）
- 9月14日～16日 山田顕義事績調査 戊辰戦争期（北海道函館市）

○展示・普及

- 5月21日 芸術学部新入生歓迎行事大学史資料展「日大・学祖・日藝」
- 7月17日 日本大学進学相談会でのパネル展示（日本大学会館）
- 7月30日・31日 国際関係学部オープンキャンパスでのパネル展示
- 8月21日 国際関係学部オープンキャンパスでのパネル展示
- 9月18日 日本大学進学相談会でのパネル展示（日本大学会館）

○講演

- 4月13日 新規採用教職員入職後研修（日本大学会館）
- 4月14日 日本大学豊山中学校・高等学校（同校体育館）

大学史編纂課だより

第2号

2011年9月30日 発行

編集・発行 日本大学広報部大学史編纂課
〒359-0003 埼玉県所沢市中富南4-25
TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

印刷 株式会社 文成印刷

(2011.9.30 5000)